

10 世紀以前ミャンマーの諸遺跡出土の宗教遺物について ～下ビルマ編～

渡邊 佳成

敬虔な仏教徒の国として知られるミャンマーに仏教が伝わったのは、いつ頃のことであろうか。そして、今日のような上座仏教の信仰が確立するのはいつのことであろうか。池田の指摘するとおり、仏教渡来を語る伝説がいくつもあることから、ミャンマーへの仏教伝播が一度限りのものではなく、回を重ねながら「緩慢かつ波及的に定着していった」（池田 1995: 54-74）ことは間違いない。事実、本稿で詳しく見るように、古代の城市遺跡（図 1）から出土した仏像、経典などを見ても、様々な仏教が存在していたことは疑いようがないことである。

それでは、そうした様々な仏教が今日のような上座仏教に統一されていくのはいつのことであろうか？ 通説では、パガン朝の成立後、初代のアノヤーターが海岸部にあったモン族のタトーン王国を滅ぼし（1057 年）、そこで栄えていた仏教をパガンの地にもたらし、パガンの仏教を浄化したと考えられている。しかし、この時点での仏教が純正なものであったのかについては、碑文研究の第一人者であったタントゥンほか多くの研究者が疑問を提出している（Than Tun 1978）。そして、伊東は、パガン朝の時代に上座仏教が確立したこと自体を疑う新しい説を提示し、ミャンマーの仏教史の問題にとどまらず、ミャンマーの歴史における王権の正統化、東南アジア史におけるヒンドゥー化と土着化を考える上で、重要な問題を提起している（伊東 2001b）。さらに、注目すべきものとして、アウントゥインは、下ビルマのモン文化が上ビルマのビルマ族の文化を「文明化」したというのは植民地時代に作られた幻想（これを彼は ‘Mon Paradigm’ と呼ぶ）にすぎないと主張し、下ビルマにおけるモン文化の存在自体を疑う説を提示して論争をひき起こしている（Aung-Thwin 2005; Stadtner 2007; Stadtner 2008）。仏教のみならず、パガンの様々な文化が「モン文化」を継承して発展、形成されたとする従来の説に対する批判としては、「モン文化」そのものの再検討が必要であるとか、ピューの影響を考えるべきであるという点など、首肯できる部分もかなり多いが、モン文化を完全に否定しピューの文化一辺倒で、パガンの形成を考えるのは、少し行き過ぎであるように思える（スタッドナーは、アウントゥインの説を ‘Pyu Paradigm’ と呼んで、強く反論している）。

両者の論争にただちに答えることは難しいが、‘Mon Paradigm’ や ‘Pyu Paradigm’ の当否を考える前に、まず第一に行わなければならない作業は、10 世紀以前のミャンマーにおける宗教、文化を考えるにあたって、どのような史料が残されているのかを明らかにすることである。漢籍史料などの文字史料については別稿にゆずるとして、ここでは、最近、徐々に行われつつある考古調査の成果も紹介しつつ、問題となっている下ビルマを中心に、遺跡ごとに見ていくこととしたい。なお、本稿で取り上げるエーヤーワディー流域やシッタウン流域とは別個の地域・文化を形成していたと考えられる西海岸のヤカイン地方や、マレー半島部のタニンダーイー（テナセリム）地方については、別稿で検討していくこととしたい。

タイエーキッターヤ Thayekhittaya（シュリークシェートラ Śrī Kṣetra）遺跡（3-10c.）（図 2）

エーヤーワディー河下流域上部にあたる、今日のピー Pyay（プローム Prome）の南東約 6.5km フモーザー Hmawza に位置する。二重、三重の城壁で囲まれた、東西 4km、南北 5km の楕円形の都城。外城の外に、巨大な砲弾型の覆鉢を持つパヤーギー Payagyi、パヤーマ Payama の両パゴダ、高さ 47m の円筒形のボーボー

ジーBawbawgyi・パゴダ、アーチ構造を持つ小ぶりな寺院ベーパーBebe、十字形の平面プランを持つレーミイエツプナーLemyethna などの仏教建築が散在し、王宮跡とされる内城の近くにも東西ゼーグーEast Zegu, West Zegu 寺院などが遺されている。

ピュー族の城市遺跡だけでなく、ミャンマーの古代城市遺跡としても最大規模を誇る（図 3）。漢籍史料に見える驃国の都城についての記述に一致するところが多く、また、音写の一致から玄奘の大唐西域記などの室利差（察）呾羅国に比定されている。

ピューの城市遺跡に共通して見られる、火葬した人骨が納められた骨壺、銀貨（片面が玉座 Bhaddapīṭha もしくは旭日など、もう一面にシュリーヴァッサ Śrīvatsa などが打刻）（図 4、5）、指跡紋つき煉瓦（図 6）、チン・ピーズなどが出土しているほか、仏教、ヒンドゥー教などの宗教遺物も多く出土しているが、この遺跡の出土遺物で注目すべきは、巨石文化をしのばせる多くの遺物である。土器製の骨壺も多く出土しているが、高さ 90–165cm、直径 80–120cm の大型の石製の骨壺も発見されており、一部は碑文が刻まれている（後述）。そのほか、周囲 9m もの円形の台座の一部、最大のもので 2.5*2*0.45m の三尊像のレリーフ群、2.75*1.9*0.3m の「帝釈窟説法」図？のレリーフなどが都城の内外から出土している。

英領時代および独立後の 1970 年代までの発掘の成果は、Luce 1985 にまとめられているが、その後の文化省考古局による発掘については、簡単な概要を除けば、正式な報告はまだ出版されていない。ここでは、Luce 1985 によりつつ、出土地ごとに、主要な宗教遺物を紹介する。

Khin Ba Gon（Kalagangon 村の近く）

stone slab 石板（Luce 1985: pl.27, Stadtner 2011: 205, Guy 1999: 016）（図 7）

163*140*15cm 下記の舍利容器のカバー？、ストゥーパのレリーフ

round hollow silver-gilt casket 塗銀舍利容器（Luce 1985: pl.28-29, Tha Myat 1963: 34, Guy 1999: 019）（図 8）

高さ 66cm（樹の部分も含む）、直径：上部 33cm、底 41cm

蓋の上に菩提樹、円筒の表面に過去四仏

上部の縁に、ピュー、パーリ碑文（それぞれの仏陀の名前、經典の一節）

底部の縁に、ピュー碑文（四仏の左脇の僧侶（弟子）の名前、寄進者の名前）

仏坐像（金）（Luce 1985: pl.31a）（図 9）

高さ（頭光を含む）16.5cm、台座 8.3cm 禪定印、半跏趺坐

金葉（Luce 1985: pl.33-34, Tha Myat 1963: 25-33）（図 10）

16.5*3.2 cm、20 葉、各葉 3 行（19 葉 4 行、20 葉 2 行）、真ん中左右両端よりに穴

グプタ文字風の（？）ピュー文字のパーリ語

最近の説：5 世紀のパッラヴァ朝の銅板刻文の文字に酷似している（Guy 1999: 19）

パーリ仏典 Abhidhamma および Vinayapīṭaka などからの抜粋、8 種（Luce 1985: p.139）

Kalagangon

ヴィシシュヌ立像（石）（Luce 1985: pl.49b）（図 11）

40.6 * 22.9 cm 四臂、ガルーダの上に乗る

アナンタ龍の上に横たわるヴィシュヌ Viṣṇu Anantaśāyin (石) (Luce 1985: pl.50) (図 12)
39.4 * 36.8 cm

Nga Shin' Gan (Mahtaw 村)

埵仏 (Luce 1985: pl.55f) (図 13)

触地印、結跏趺坐の仏の両脇に菩薩

台座の下に Nāgarī 文字で三行の帰依文

埵仏 (Luce 1985: pl.58a) (図 14)

転法輪印、結跏趺坐の仏

台座の下に Nāgarī 文字の帰依文?

埵仏 (Luce 1985: pl.60a,b, Guy 1999: 24-25) (図 15)

ピュー後期の典型的な埵仏 (Guy 1999: 24)

触地印、結跏趺坐の仏の両脇に仏塔、その上に Nāgarī 文字でパーリ語の帰依文

裏面に寄進者の名 ḥā: carke

埵仏 (Tara 菩薩立像) (Luce 1985: pl.56a, Guy 2002: 028) (図 16a, b)

7.6 * 5.1 * 2.1 cm

Taunglonnyo 村の南の水田

埵仏 (Luce 1985: pl.58c) (図 17)

宝冠仏 Jambupati Buddha、Twin Miracle (双神変)

Shwenyaungbin の丘上 (Khin Ba Gon の北西、Taunglonnyo 村の南)

誕生図 (石彫) (Luce 1985: pl.47a) (図 18)

38.1*19*6.4cm

初転法輪図 (石彫) (Luce 1985: pl.47b) (図 19)

34.3*21.6*11 cm 結跏趺坐

醉象調伏図 (石彫) (Luce 1985: pl.47c) (図 20)

33*19*7.6cm

Twin Miracle (双神変) 図? (石彫) (Luce 1985: pl.47d) (図 21)

仏坐像と弥勒菩薩像 (石彫) (Luce 1985: pl.47e) (図 22)

24.8*19*8.9cm 半跏趺坐

Nyaungnibin mound (Khin Ba Gon の西、Thaungbyegon の東、Kwingyikhwın の南端)

初転法輪図 (石彫) (Luce 1985: pl.46) (図 23)

40.6*19*9 cm

埵仏の鋳型 (ブロンズ) (Luce 1985: pl.55a,b) (図 24) 三尊、触地印の仏、脇侍は菩薩?

Yindaikkwin

仏坐像（ブロンズ）（Luce 1985: pl.45a）（図 25）

触地印、左手に鉢、半跏趺坐

Yindaikkwin の西のマウンド

仏坐像（ブロンズ）（Luce 1985: pl.43f）（図 26）

高さ 9.5cm 両手とも同様のヴィタルカ vitarka 印、半跏趺坐、蓮華座

Yindaikkwin の北のマウンド レンガの部屋（152*137cm）の跡から他の像とともに

菩薩像（ブロンズ）（Luce 1985: pl.44f）（図 27）

高さ 13.3cm Yindaikkwin の北西のマウンド

Bawbawgyi Pagoda

仏坐像（ブロンズ）（Luce 1985: pl.44a）（図 28）

触地印、結跏趺坐

菩薩立像（ブロンズ）（Luce 1985: pl.31b, Guy 1999: 024）（図 29）

高さ 20cm 化仏：阿弥陀、四臂

埵仏（Luce 1985: pl.59a）（図 30）

転法輪印、結跏趺坐の仏、両脇にヴィアーラ vyala

台座の下に Nāgarī 文字の帰依文？

同様のタイプの埵仏がシュリークシェートラ各地で出土

埵仏（Luce 1985: pl.61ef）（図 31）

7 * 5.1 * 2.1cm 左手で触地印、半跏趺坐

Kanwet-khaung-gon（Bawbawgyi Pagoda の南）

仏坐像（砂岩）（Luce 1985: pl.16-17, Tha Myat 1963: 41-43, Guy 1999: 020）（図 32）

高さ 57cm 半跏趺坐、頭部欠

台座に 前面 6 行、左 5 行、裏 5 行、右 5 行の碑文；サンスクリットの短い語句の後にピュー語の長い説明が続く。サンスクリットは、7,8 世紀のグプタ文字、ピュー語は、初期南インド系の文字で記されている。「Jayacandravarman が、彼と弟（tasyānuja）Harivikrama との間に、平和、友好関係を樹立し深めていくことを祈念して、彼の…guru, Guhadipa を証人としてこの仏像を建立した。

Jayacandravarman は、二つの都市を並行して一日の内に建設した」

仏坐像（ブロンズ）（Luce 1985: pl.43d）（図 33）

両手とも同様のヴィタルカ vitarka 印、半跏趺坐

Myinbahu Pagoda（Pyogyngyi-gon ?）

埵仏（Tha Myat 1963: 38） Abhidhamma からの抜粋、Kanada-Telugu 系の文字（6-7c.）

埵仏（Luce 1985: pl.58d,e, Tha Myat 1963: 39）（図 34） 寄進者の名

埵仏 (Luce 1985: pl.56b) (図 35)

菩薩立像 (埵仏) 四臂 高さ 7.6 cm

Mhuteshi (Hmot-she)村

ヴィシュヌ レリーフ (砂岩) (Museum 説明文) 1920 発見

高さ 61cm、周径 81.3cm 6 世紀

ヴィシュヌ像 (砂岩) (Museum 説明文) 1963 発見

63.5 * 50.8 * 27.9 cm 5-6 世紀

Kyundawzu 村

金葉 (Tha Myat 1963: 40)

ピュー文字 パーリ語 (5c.-6c.)、仏陀を賞賛する文

Payagyi Pagoda

弥勒?頭部 (ブロンズ) (Luce 1985: pl.44d, e) (図 36)

頭部にストゥーパ

骨壺 (巨石) (Luce 1985: pl.5-7, Tha Myat 1963: 47-51, Stadtnr 2011: 204, Moore 2007: 136) (図 37)

Payagyi の南 65m の墓から

4 基の骨壺にそれぞれ 1 行ずつ、ピュー文字の碑文

a. 35 年 (AD673)、Sūriyavikrama の親族 (?), 死亡 高さ 72.4cm、周径 272cm

b. 50 年 (688) の第 5 月、Sūriyavikrama、64 才で死亡 高さ 96.5cm、周径 213cm

c. 57 年 (695) の第 2 月 24 日、Harivikrama、41 才 7 カ月 9 日で死亡 高さ 94cm、周径 211cm

d. 80 年 (718) の第 2 月 4 日、Sihavikrama、44 才 9 カ月 20 日で死亡 高さ 63cm、周径 159cm

a. の裏、ピュー文字 8 行、間にブラフミー文字、未解読

やや小型の骨壺 (a. の近くで発見、土器製?) (Luce 1985: pl.8) (図 38)

1 行のピュー碑文、未解読

Payama Pagoda (Luce 1985: p.145, Guy 1999: 025)

楽人、踊り子像 (ブロンズ) 5 体 平均 11.5cm (図 39)

パゴダの近くのマウンドから高さ 28cm の装飾を施したブロンズの鐘、ピュー銀貨 (シュリーヴァ
ッサ) 2 枚とともに出土

出土地・発見場所不明

ヴィシュヌとラクシュミー立像 (石) (頭部欠) (Luce 1985: pl.49a, Gutman 1999: 033) (図 40)

102 (+) * 63.5cm

ヴィシュヌ 四臂、ガルーダの上に乘る ラクシュミー 二臂、蓮華座

ガルダのレリーフ（砂岩）（Guy 1999: 24-26）（図 41）

約 1.5 m

菩薩坐像（ブロンズ鍍金）（Guy 1999: 23-24） V&A Museum 所蔵（図 42）

パガンで発見

18.5cm 台座基部にピュー刻文 “ba.....Metriya ba”

ルースは弥勒に比定（cf. Luce 1969-70: I 188-191, III pl. 55）

以上の出土遺物から明らかなように、少なくとも、シュリークシェートラの周辺においては、7-8 世紀～9 世紀にかけて、パーリ仏典を中心とする仏教が信仰されており、また、菩薩やヒンドゥー神像も出土することから、大乘仏教やヒンドゥー教の信仰も存在していたことは間違いない。

トウンテーTwante 地域（図 1、43、44）

ヤンゴンの西南西約 30km に位置し、陶器生産で有名な地域で、14～16 世紀の窯址も幾つか発見されている。また、現在のトウンテーの町から東約 10km の Kanbe 村の南東 1km のところには、パガン朝の初代アノーヤターの名が刻まれた大型のテラコッタのレリーフが基壇にはめ込まれていたことで有名なマウンディー Maung Di パゴダ、城郭の存在が確認されているカービン Khabin 遺跡などがある。

Dagondaing 村（北緯 16° 30′ 東経 95° 55′ ）（San Win 2007, Moore 2007: 201-202）

仏立像（ブロンズ） 燃燈仏? Dipankara 6～7 世紀、アマーラヴァティー様式？

2005 年 5 月 15 日、家の修復工事中に発見 3 体（66cm, 45.7cm, 38.1cm）（図 45、46、47）

Taloktaw 村（Twante の東約 4km）

仏立像（ブロンズ）

2005 年 7 月 12 日、僧院の敷地内から出土 2 体（40.6cm, 33cm）（図 48）

Kanbe 村（Twante の東約 10km）**Hsutaungpyi Pagoda**（Luce 1969-70: pl.54a）

埵仏（テラコッタ） 11.4 * 6.4 cm 菩薩 Lokanātha 坐像 遊戯坐（図 49）

アニルッダの名を持つ Pl.7 の埵仏（イエザージョー Yezagyo）に類似

Kanbe 村（Twante の東約 10km）**Hsutaungpyi Pagoda 僧院**（Luce 1985: pl.73f）

仏立像レリーフ（石） 41.9 * 19.1 * 7.6 cm 仏立像の上部に大乘（密教）の五仏坐像（図 50）

Kanbe 村（Twante の東約 10km）**Kyaungthit 僧院**（Hsutaungpyi Pagoda の横）

仏坐像（ブロンズ）2 体（24.1 cm（像高 9.4 cm）, 19.1 cm（像高 9.7 cm））

仏立像（ブロンズ）3 体（22.9 cm, 19.1 cm, 17.8cm）（図 51、52、53、54、55）

2005 年 6 月 16 日、僧院の敷地内から出土 ピュー後期～パガン時代

Maung Di Pagoda (Luce 1969-70: pl.4, 5) (図 56)

大型のテラコッタレリーフ (埴仏) 高さ 78.7 * 45.7 * 11.4~15.2 cm (図 57、58、59)

パーリ語碑文 (モン文字) Aniruddha (アノーヤター) の奉献

Maung Di Pagoda 近くの水田 (Luce 1985: pl.76d)

仏坐像 (ブロンズ) 高さ 14.6 cm (図 60)

Kyaik Ba の北 400m (Kanbe の南 6.4km) (Luce 1985: pl.64f)

仏坐像 (ラテライト) 高さ 66 cm + 頭部、右手欠

出土地・発見場所詳細不明

仏坐像 (ブロンズ) Twante のパゴダ址の舍利収納室から収納? 容器 (土器) とともに発見 (図 61)
(Luce 1985: pl.76bc)

ヤンゴン Yangon 地域 (図 1)

ヤンゴン自体は、18 世紀後半にコンバウン朝の海岸地域の拠点として建設され、英領時代に植民地政庁が置かれて発展拡大した都市であるが、それ以前から、シェーダゴン・パゴダの門前町としてのダゴン Dagon、対岸のダラ Dala、タンリン Thanhlin (シリアム Syriam) は、海への玄関口として栄えていた。

Tadagale Nāgasena Temple 跡 (ヤンゴンの北 13km) (Luce 1985: pl.66a, 74, 76)

仏坐像 (ラテライト) 群 10c. ? の寺院跡? 1938 に発見、その後の工事で破壊 (図 62)

仏坐像 (ラテライト) 91.4 * 76.2 cm (図 63)

仏立像 (ブロンズ) 高さ 15.2 cm 遺址の南側から発見、5c.頃のグプタ様式 (Lu Pe Win) (図 64)

埴仏 (テラコッタ) 遺址の北側の井戸から発見 (図 65)

裏にパーリ語碑文 (10c.の書体) 寺院の名前 Nāgasena、僧侶の名 ther bilāh (Vilāsathera)

埴仏 (テラコッタ) 9 列 73 仏坐像 (図 66)

埴仏 (テラコッタ) 舎衛城の奇跡 (図 67)

埴仏 (テラコッタ) 上部に寝釈迦 (図 68)

Kyaik De-ap (現在の Botahtaung Pagoda) (ヤンゴン市内、ヤンゴン (フライン) 川岸) (Luce 1985: pl.72a-f,

73a-e) 第二次世界大戦中の爆撃によって露出した舍利収納室に、収納容器、埴仏などが納められていた。

四仏坐像 (金) 舍利容器の中に収納、細長いストゥーパの四面に仏像が刻まれている 高さ 11.4 cm (図 69)

埴仏 (テラコッタ) 14.6 * 8.9 cm 裏面にパーリ語の帰依文 (7c.の書体) (図 70)

埴仏（テラコッタ） 16.5 * 11.4 * 1.3cm （図 71）

埴仏（テラコッタ） 16.5 * 11.4 * 1.3cm 二仏、左右対称に併立、Twin Miracle（双神変）を表現（Luce）
（図 72）

埴仏（テラコッタ） 19.1 * 14 * 2.5cm 上部に寝釈迦（図 73）

埴仏（テラコッタ） 11.4 * 7.6 * 2.5cm （図 74）

埴仏（テラコッタ） シュリークシェートラの Myinbahu 出土の埴仏に類似（図 75）

バゴー（ペゲー）Bago (Pegu)周辺地域（図 1）

16 世紀の第一次タウンゲー朝のバインナウンによって建設されたバゴーの都市の東に、長方形の都市遺址（図 76）があり、9 世紀のものとされるが、確かな根拠があるわけではない。また、バゴー周辺にも幾つか都市遺址が確認されているが、時代を特定するだけの組織的な発掘は未だ行われていない。

バゴーから東北約 32km のヤー Waw の町外れのチャウントゥ Kyôntu 村には、レンガ、ラテライトの城壁が確認されており、その内側にパゴダが建立されている（現在のものは後世の築造）。

古バゴー都市（Luce 1985: pl.76ef, 87）

仏立像（ブロンズ） 27.3 * 7.6 cm 東城壁の内側の傾斜地の池から発見（図 77）

仏 頭部（テラコッタ） クメール様式 発見地は同上（図 78）

石板レリーフ（両面） Hinda 丘の東の Thawka 園から発見（図 79、80）

片面は、成道？、成道後のブッダ、誕生、もう一面は酔象調伏

Kyôntu Pagoda（Luce 1985: pl. 77-81）

テラコッタ板（円形浮彫） 51cm 四方、厚さ 11.4 cm パゴダの南側基壇（図 81、82、83）

800m ほど東の Let-hkôk-pin Pagoda などでも同様のテラコッタのレリーフ（図 84）が発見されている

また、後述する Winka などの遺跡からも同様のテラコッタ板が出土

Nagawun Thein (Nāgavana Sīmā)（Luce 1985: pl. 82-83）（バゴーの南 8km）

仏立像（砂岩） 全高約 2m * 60 * 33 cm ブッダ左足の足下に象（図 85）

シッタウン河口からタンルウィン河口地域（図 1、86）（Moore 2007; 伊東 2006; 伊東 1994; San Win 1986）

タトーンをはじめとする、シッタウン、タンルウィン両河にはさまれた海岸地域は、北は上ビルマ中央平原地域、東へはチャオプラヤ流域やチェンマイ、南はマレー半島へとつながる交通の要衝にあたり、モン族、モン文化の中心地とされてきた。また、仏教史の上でも、アショーカ王による第三結集後に派遣されたソーナ、ウッタラ両長老が渡来したとされるスヴァンナブーミ *Suvaṇṇabhūmi*（金地国）の地に比定されることが多い。しかし、10 世紀以前のものと考えられる考古遺物はあまり多くなく、また碑文をはじめとする文字史料もほとんどなく、漢籍などの外国史料の伝える情報も限られているため、バガン時代以前の歴史は、ほとんど不明の状態であった。しかし、1980 年代以降、航空写真による都市遺跡の発見、現地調査による城郭、

城壁の確認、一部の発掘調査などによって、この地域には、少なくとも 8 ヶ所の古代城市が存在していたことが明らかになった。ただ、現在のところ、組織的な大規模な発掘は行われておらず、また、一部行われた考古局による発掘も概要程度の発表で、詳細な報告書は発行されていないので、都市の年代も含めて不明な点も多く、それらが、「モン」の都市であるのか、ピューの影響下にあったのかなど、この地域の政治的、経済的な状況などについても、議論が分かれている。ここでは、精力的な調査を続けているウー・サンウィン、および彼の協力を得てこの地域の古代城市について研究、紹介をしている、伊東、ムーアなどの論考を参照しつつ、2011-12 年に行った現地踏査（サンウィン氏の案内による）の結果もふまえて、主な遺跡と遺物について紹介する。

この地域の城市遺跡は、いずれも、石、煉瓦、ラテライトなどで補強された 2 重、3 重の城郭を持つが、その形は、伊東の分類によると、a. 楕円に近い形（チャイカター）、b. 山を背、海側に扇形に広がる形（ウィンカー、タトーン古城市）、c. 直線による城郭、角は丸み（タトーン新城市、サンパーナゴル、（アイエーテマ））の三タイプに分かれ、中央に王宮らしき構造を持つのは、チャイカターとタトーンのみで、ピューの城市遺跡群ほど、統一的な形態を有していない。

ピューの城市遺跡の指標の一つである指跡紋つき煉瓦は、アイエーテマ、サンパーナゴル（c. タイプの城郭）を除く遺跡で確認されている（図 87）が、ヤカインのウェーダーリーなどの古代城市でも確認されているので、これはピューの影響と考えるよりも、パガン以前のミャンマーにかなり広い範囲に共通する建築文化が存在したことを示すものと考えられる。また、このタイプのレンガはミャンマー地域のみならず、東のチャオプラヤー流域のドヴァーラヴァティー時代の遺跡からも出土している（伊東 2001a）ので、東南アジア大陸部西部における共通の文化の存在を考えてもいいかもしれない。

また、銀貨も、一面はピューのものと同じでシュリーヴァツァ Śrīvatsa であるが、その裏面は法螺貝（図 88）もしくは Kalathā 聖水壺で、ピューのものとは異なっている。むしろ、レンガ同様に、ドヴァーラヴァティーの銀貨との親近性が強く、東との交流の深さがうかがえる（伊東 2001a）。

チャイカター Kyaikkatha (6c.?–8c.?) (Moore 2007; 伊東 1994; San Win 1986) この地域では最大の城市遺跡で、ラテライトや煉瓦を利用した外城郭と内城郭が確認されている（図 89、90、91、92）。外城郭は、東側は二重（間は 15m の濠）で、東西 2.4km、南北 0.8km、周囲 7.2km の広さを有し、現存する城壁の高さは、2.4m（東）～6m（北）である。内城郭は、一辺 800m ほどの丸みを帯びた四隅を持つ四角形で、四重の城壁（間に濠なし）に囲まれている。下ビルマに特徴的な（モン＝タイプとも呼ばれる）八角形の基壇を持つパゴダがあるが、当時のものかは不明。1981 年のフィールド調査の後、1986-98、2000 年に、7 カ所の発掘調査が行われている（KKT1~7）。

煉瓦建築址 KKT1（住居址；大部屋 3、小部屋 9）（伊東 1994）

壺に入った大小の銀貨 大銀貨 832、小銀貨 42、大銀貨破片 109 ほか

内城 道路工事の際に出土 Kyo Bin Kon 僧院？（伊東 1994; Moore 2007）

銀貨 350

グプタ様式の仏像（銅 or ブロンズ）5 体 15~25cm 14 c. (Moore & San Win 2007: 211) のもの？

出土地不明

埴仏（図 93、94、95）

リング？（図 96）

タイカラー-Taikkala 地方(アイエーテーマ Ayetthema、ウィナーカ Winka) (Moore 2007;伊東 1994; San Win 1986; Myint Aung 1999) それぞれ、ケラータ Kelasa 丘陵の北北西、北西の麓に位置し（図 97）、アイエーテーマ城市は、丘陵から張り出した小山に挟まれた部分の南と北を城郭でふさいでいて、全体として台形状で、南の城壁は二重で、高さ 6m、内側は 90m、外側は 210m の城壁が確認されている。北の城壁も二重で、高さ 8m、内側、外側とも 600m が現存している。ウィナーカ (2c.?-11c.?) では、村の南に突き出た丘の北側に沿って、高さ 4.5m（頭部 3~4.5m、基底部 15m）の煉瓦城郭がシッタウン河の岸まで伸びている。それは、山側では、丘の斜面に沿って 3km ほど石垣が半月形に伸び南のタウンジー村のところで平地にでてくる。アイエーテーマのチャイッタラン Kyaik Talan（ミヤテインダン Myatheindan）パゴダから発見されたパガン朝のチャンズィッター王のモン語碑文（11-12 世紀）に、ソーナ、ウッタラ両長老が仏教を伝えたスヴェンナブーミを訪れパゴダを修復したという記述があり（Luce 1969-70 I: 56）、15 世紀のカルヤーニー碑文に、両長老がタイカラーに到着したと記されていることもあって、この地域では最も早く（1975-76）発掘調査が行われた（AYT 1）が、注目すべき成果はなく、むしろ、南のウィナーカの発掘で（WK 1-6）、パガン以前の時期と思われる僧院跡（WK 1）、ビーズ（WK 2）、埴仏（WK 6）などが出土している。

丘の西端の煉瓦建築跡（WK 1）（伊東 1994; Moore & San Win 2007; Myint Aung 1999）

20 m² の正方形 中央に大きな部屋、14 の異なった大きさの部屋

ビーズ テラコッタ、紅玉髄

注口・注首片 ペイタノー出土のものに類似、2c.頃

WK2, 4, 6 および表面採集（Moore & San Win 2007; Myint Aung 1999; Moore 2007: 198）

埴仏（テラコッタ）の破片（完品も含む）131 個

WK6 の 4 個はモン文字の刻文が刻まれており、そのうち 2 個は、台座部分に四行の文字 ナコンパトムのモン碑文（6c.）に類似？（Myint Aung 1999: 52-53）

WK6 および表面採集の各 1 個は、後述する Kawgun Cave で発見されたものに類似（図 98）
（Myint Aung 1999: 40-42; Mya 1961 I: pl. 117）

ほかに採集場所不明であるが、法螺貝の刻された銀貨も発見されている（図 99）。

ゾウトウ Zothoke (Moore 2007; Luce 1985: pl. 67-71; Stadtner 2011; 伊東 1994; San Win 1986) 平行四辺形もしくはひし形の右半分の部分に六重の城郭（東北隅から西南隅までの対角線の距離 1.6km、東南へ

西北 2km) が残っている (図 100)。その西南部に象と馬のレリーフで有名なラテライトの壁 (高さ 2.25m) が 100m ほど残っている (シンダミンダ Hsindat Myindat) (図 101、102、103)。また、城郭内のチャイティーサウン・パゴダに残されている巨大なラテライトの基壇 (図 104) を見ると、往時の繁栄ぶりがしのばれるが、考古学的な調査はいまだ行われていない。

タトーン Thaton (7c. – 10c.) (Moore 2007; 伊東 1994; San Win 1986) モン族の中心都市として繁栄し、1057 年、パガンのアノーヤター王によって滅ぼされたという事件は有名であるが、その事実を裏付ける確実な証拠は何一つなく、Aung Thwin は、“Mon Paradigm”と呼んで、それは後世の年代記の記述と植民地時代の歴史家の作り出した虚構であるとまで論じて (Aung-Thwin 2005)、大きな議論を呼び起こしている。現存する城市遺跡は、東西 1.2km、南北 2.3km の二重の城郭とその間の濠に囲まれた長方形で、中央部に四重の城壁と濠 (345*324m) の王宮跡が認められる (新城市) が、それとは別に、北部分の城壁の外側に一本、内側に二本、南部分の外側に二本の城壁が東の山に延びている (古城市) (図 105)。組織的な発掘はいまだおこなわれておらず、都市の年代を決定することは難しいが、古い仏塔などから発見された仏像その他の出土品、レンガなどから、7~10 世紀のものとする説が有力である。

ダジャー・パゴダ Thagya Paya (Luce 1985: pl. 92) (シュエーザヤン・パゴダ Shwe Zayan Paya の敷地内)

ジャータカ・パネル (テラコッタ) 約 70cm 四方、厚さ 15.2cm 仏塔の覆鉢下部の基壇にはめ込まれている。11-12 世紀のものとされる。現在は白い漆喰で塗られて原型はほとんどわからない。保存状態のよいものは、博物館に? (図 106)

シュエーザヤン・パゴダ Shwe Zayan Paya の東、学校の校庭

埴仏 (図 107)、そのほか Gaw Le Tha から埴仏が発見されている (図 108)

カルヤーニ・ティン Kalyāṇī Stīṃ (Luce 1985: pl. 92-95) (シュエーザヤン・パゴダの南)

セーマ石 (結界石) ジャータカのレリーフ、西南角の石柱片には 20 行以上の 11 世紀半ばの古モン語刻文が刻まれており、ティン (シーマ、セーマ: 戒壇) の設立が記されている。
(Luce 1985: pl. 92d)

仏立像 (砂岩) 戒壇の東のマウンドで発見、パガンの仏像のプロトタイプとされる。(Luce 1985: pl. 96ef; Stadtner 2011: 168) (図 109)

Kye-tu-ywe Thaung 村 (タトーンの東 24km) 現在は、タトーンの Nandawya Kyaung Taik 僧院に (Moore 2007: 201)

仏立像 (ブロンズ) 30cm アマーラヴァティ様式 (7-8c.) (図 110、111)

出土地不明

仏立像（ブロンズ）、シュリークシェートラ出土のものに類似（7-8c.）（Luce 1985: pl.96）（図 112）
四臂のシヴァ Śiva とパールヴァティー Pārvatī（砂岩レリーフ）（Luce 1985: pl.88; Guy 1999: 026）
（図 113）

122 * 71.1 cm 9c.

オリッサ中世初期彫刻との関連、日本軍の爆撃で破壊

アナンタ龍の上に横たわるヴィシュヌ Viṣṇu Anantaśāyin（砂岩レリーフ）（Luce 1985: pl.89）（図 114）

106.7 * 55.9 cm 9c.

日本軍の爆撃で破壊？

アナンタ龍の上に横たわるヴィシュヌ Viṣṇu Anantaśāyin（砂岩レリーフ）（Luce 1985: pl.90）（図 115）

137.2 * 91.4 cm 9c.

日本軍の爆撃で破壊

サンパーナゴル Sampanago（伊東 1994; San Win 1986: Moore, San Win & Pyiet Phyo Kyaw *forthcoming*） 河口のモウッタマ Muttama（マルタババン Martaban）から 18km ほど上流のタンルウィン河右岸に面し、間に濠をはさんだ三重の城郭で囲まれた城市址で、東西 800m、南北 2.4km の大きさと、丸みを帯びた隅を持っている。高さ 6m ほどの城壁が南側に残っている。王宮跡、内城らしきものは認められない（図 116）。今のところ、表面採集のみで、発掘調査は行われていない。中央の丘の上のパゴダ址から埴仏などが見つかり、ふもとの水田からはビーズなどが採集されている。ただ、周辺の多くの遺跡から見つかる指跡紋つき煉瓦が未発見であることから、伊東は、この城市の年代をバガン時代以降としている。

コーゲン洞窟寺院 Kawgun Cave（Luce 1985: pl. 98-100: Temple 1894; Ray 1932） カイン Kayin（カレン Karen）州の州都パーアン Hpa-an の近郊、モーラミヤイン Mawlamyaing、モウッタマからタンルウィン河の上流 28km、サンパーナゴルの北 8km に位置する鍾乳洞の寺院で、壁面に無数の埴仏、仏像レリーフが貼り付けられ、洞内にも多数の仏像が安置されている。現存するものの多くは、ニャウンヤン、コンバウン時代以降のものであるが、以下のような、碑文、ヒンドゥー神像などが見つかっている。

アナンタ龍の上に横たわるヴィシュヌ Viṣṇu Anantaśāyin（石レリーフ）（Luce 1985: pl.99; Gutman 2002: 041）（図 117、118） 139.7 * 78.7 * 22.9 cm

従三十三天降下 Decent from Tāvātimsa Heaven（石レリーフ）（Luce 1985: pl.100a; Gutman 2002: 036）（図 119） 137.2 * 83.8 * 17.8 cm

従三十三天降下 Decent from Tāvātimsa Heaven（石レリーフ）（Luce 1985: pl.100b, cd; Gutman 2002: 036）（図 120） 左半分喪失 11 世紀？のモン語碑文（創建者の名前？）

サンスクリット刻文(Luce 1985: pl.98a; Temple 1894) (図 121)

洞窟入口近くの西壁の下に三行

Parameśvara-pāda のみ判読、6-7 世紀の文字

参考文献

- Archaeological Survey of India, Burma Circle, 1936, *List of Archaeological Photo-Negatives of Burma stored in the Office of the Superintendent, Archaeological Survey, Burma Circle, Mandalay (corrected up to 31st March 1935)*, Delhi: Manager of Publications.
- Aung Kyaing, 2011, *Votive Tablets of Myanmar*, vol. 3, Yangon: Dept. of Archaeology, National Museum & Library, Ministry of Culture. (ビルマ語)
- U Aung Myint, 1998, *Kaunkin Dhatponmya hma Myanmar Shehaung Myodawmya* (航空写真から見たミャンマーの古代城市), Yangon: Dept. of Archaeology, Ministry of Culture. (ビルマ語)
- Aung Thaw, 1968, *Report on the Excavations at Beikthano*, Rangoon.
- Aung Thaw, 1972, *Historical Sites in Burma*, Rangoon: Ministry of Culture.
- Aung-Thwin, Michael, 2005, *The Mists of Ramanna: The Legend That Was Lower Burma*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Aye Hla, 2006, "Buddhist Iconographs of Pyu and Bagan," *Myanmar Historical Research Journal* 18: 25-43.
- Berliet, Ernelle, 2011, *Territoires et urbanisation en Birmanie, des origines (Ile s. av J.-C.) a la fin du XIIIe siecle, (Indicopleustoi: Archaeologies of The Indian Ocean 8)*, Turnhout (Belgium): Brepols Publishers.
- Chit San Win, 2011, *Pyu* (ピユー), Yangon: Panmyotaya Sape. (ビルマ語)
- Green, Alexandra & T. Richard Blurton (eds.), 2002, *Burma: Art and Archaeology*, London: The British Museum Press & Chicago: Art Media.
- Guillon, Emmanuel (James V. Di Crocco ed. & tr.), 1999, *The Mons: A Civilization of Southeast Asia*. Bangkok: Siam Society.
- Gutman, Pamela, 1999, "Vishnu in Burma," Stadtner, Donald M., (ed.), *The Art of Burma: New studies* (Mumbai: Marg Publications): 29-36.
- Gutman, Pamela, 2001, *Burma's Lost Kingdoms: Splendours of Arakan*, Bangkok: Orchid Press.
- Gutman, Pamela, 2002, "A Burma Origin for the Sukhothai Walking Buddha," in Green, Alexandra & T. Richard Blurton (eds.), *Burma: Art and Archaeology* (London: The British Museum Press & Chicago: Art Media): 35-43.
- Gutman, Pamela & Bob Hudson, 2004, "The Archaeology of Burma, from the Neolithic to Pagan," I. Glover & P. Bellwood (ed.), *Southeast Asia from Prehistory to History*, Abingdon & New York; Routledge Curzon: 149-176.
- Guy, John, 1999, "The Art of Pyu and Mon," Stadtner, Donald M., (ed.), *The Art of Burma: New studies* (Mumbai: Marg Publications): 13-28.
- Guy, John, 2002, "Offering up a Rare Jewel: Buddhist Merit-making and Votive Tablets in Early Burma," in Green, Alexandra & T. Richard Blurton (eds.), *Burma: Art and Archaeology* (London: The British Museum Press & Chicago: Art Media): 23-33.
- Hudson, Bob, 2004, "The Origins of Bagan: The Archaeological Landscape of Upper Burma to AD 1300," Ph.D. Thesis, University of Sydney.
- Hudson, Bob, Nyein Lwin & Win Maung (Tanpawady), 2001, "The Origins of Bagan: New Dates and Old Inhabitants." *Asian*

Hudson, Bob and Terry Lustig, 2008, "Communities of the Past: A New View of the Old Walls and Hydraulic System at Sriksetra, Myanmar (Burma)," in *Journal of Southeast Asian Studies* 39-2: 269-296.

池田正隆 1995 『ビルマ仏教：その歴史と儀礼・信仰』 京都：法蔵館

池田正隆訳 2007 『ミャンマー上座仏教史伝：『タータナー・リンガーヤ・サーダン』を読む』 京都：法蔵館

生野善應 1980 『ビルマ上座部佛教史：『サーサナヴァンサ』の研究』 山喜房仏書林

伊東利勝 1994 「10世紀前タトーン地域の文化変容：城市遺跡の構造と立地から」『愛大史学』3: 53-101.

伊東利勝 2001a 「綿布と旭日銀貨：ピュー、ドゥヴァーラヴァディー、扶南」山本達郎編『岩波講座 東南アジア史 1 原史東南アジア世界』岩波書店: 199-226.

伊東利勝 2001b 「エーヤワディ流域における南伝上座部仏教政治体制の確立」石澤良昭編『岩波講座 東南アジア史 2 東南アジア古代国家の成立と展開』岩波書店: 287-316.

伊東利勝 2006 「エーヤワディー流域の古代都市」『東南アジアの都市と都城Ⅱ』（東南アジア考古学会研究報告第4号）: 11-26.

Khin Maung Nyunt, 2007, "Sacred Limestone Caves of Hpa An," *Myanmar Historical Research Journal* 19: 223-232.

Le Le Win, 2007, "Thahton Myohaung (タトーン古代都市)," in *Myanma Shehaung Myodawmya* (ミャンマーの古代都市) (Yangon: Dept. of Historical Research, Ministry of Culture): 202-223. (ビルマ語)

Le Le Win, 2010, "A Study on Old Thaton City," Ph.D. Dissertation, Dept. of History, University of Yangon.

Luce, G. H., 1969-70, *Old Burma - Early Pagan*, 3vols. New York.

Luce, G. H., 1985, *Phases of pre-Pagan Burma: Languages and History*, Oxford University Press. 2vols.

Moore, Elizabeth, 2004, "Interpreting Pyu Material Culture: Royal Chronologies and Finger-marked Bricks," *Myanmar Historical Research Journal* 13: 1-57.

Moore Elizabeth, 2005, "Ancient Knowledge and the Use of Landscape: Walled Settlements in Lower Burma," in *Tradition and Knowledge in Southeast Asia*, Part 1 (Yangon: Myanmar Historical Commission, Ministry of Education): 1-27.

Moore, Elizabeth H., 2007, *Early Landscapes of Myanmar*, Bangkok: River Books.

Moore, Elizabeth, 2009, "Place and Space in Early Burma: A New Look at 'Pyu Culture'," *Journal of the Siam Society* 92: 101-128.

Moore Elizabeth, 2011, "Dawei Buddhist Culture: A Hybrid Borderland," *Myanmar Historical Research Journal* 21: 1-61.

Moore, Elizabeth & Aung Myint, 1991, "Finger-marked Designs on Ancient Bricks in Myanmar," *Journal of the Siam Society* 79-2: 81-102.

Moore, Elizabeth & San Win, 2007, "The Gold Coast: Suvannabumi? Lower Myanmar Walled Sites of the First Millennium A.D.," in *Asian Perspectives* 46-1: 202-232.

Moore Elizabeth, San Win & Pyiet Phyto Kyaw, *forthcoming*, "The Walled Site of Sampanago: The First Muttama in Mon State of Lower Burma."

Mya, Thiripyanchi U, 1961, *Votive Tablets of Burma*, 2vols, Rangoon. (ビルマ語)

Myint Aung, 1970, "The Excavations at Halin," *JBR* 53-2: 55-65.

Myint Aung, 1999, "The Excavations of Ayetthema and Winka (? Suvannabumi)," in *Studies in Myanmar History, Vol. 1: Essays given to Than Tun on his 75th Birthday* (Yangon: Inwa Publishing House): 17-64.

- Nai Pan Hla, 2011, *Archaeological Aspects of Pyu, Mon, Myanmar*, Yangon: Loka Ahlinn.
- 大野徹 1968 「ビルマにおけるピュー族遺跡の発掘調査現状」『史録』1:67-78
- Oshegowa, Nina & Sergej Oshegow (Christian Heidmann tr.), 1988, *Kunst in Burma: 2000 Jahre Architektur, Malerei und Plastik im Zeichen des Buddhismus und Animismus*, Leipzig.
- Ray, Niharranjan, 1932, *Brahmanical Gods in Burma (A Chapter of Indian Art and Iconography)*, Calcutta University.
- San Tha Aung, [1979], *The Buddhist Art of Ancient Arakan: An Eastern Border State beyond Ancient India, East of Vanga and Samatata*, Rangoon.
- San Win, 1986, "Sittaung hnit Thanlwin Myithnithwehsatkyia detha shi Shemyohaungmya ah panama lelakyet," (シッタウン、サルウィン両河口間地域の古代城市研究序説) M.A. thesis, Yangon University. (ビルマ語)
- San Win, 2004, "Mwanpaynay Khaikhto hnin Bilin naymya atwin thamaing thutethana kwinhsin khayi (27-4-2001 hma 7-6-2001) (Kyaikhto and Bilin Township, Mon State, Field work Report)," in, *Myanmar Thamaing Ahpwe Shweyatu AhteinAhmat Sasaung (Historical Commission Golden Jubilee collected Articles)* (Yangon: Ministry of Education): 272-285. (ビルマ語)
- San Win, 2007, "Taikkula Myohaung (タイカラー古代都市)," in *Myanma Shehaung Myodawmya* (ミャンマーの古代都市) (Yangon: Dept. of Historical Research, Ministry of Culture): 161-183. (ビルマ語)
- San Win, 2007, "Twante Myonay Pawdawmu Bodayoppwadawmya Lelayekhayi (トゥンテー・ミョウネー出土仏像研究調査紀行)," *Myanmar Historical Research Journal* 19: 233-278. (ビルマ語)
- Stadtner, Donald M., 2007, "Demystifying Mists: The Case for the Mon," A conference paper, Discovery of Ramanya Desa: History, Identity, Culture, Language and Performing Arts, Chulalongkorn University, Bangkok. 10-13 October, 2007.
- Stadtner, Donald M., 2008, "The Mon of Lower Burma," in *JSS* 96: 193-215
- Stadtner, Donald M. (photography by Paisarn Piemattawat & Donald M. Stadner), 2011, *Sacred Sites of Burma: Myth and Folklore in an Evolving Spiritual Realm*, Bangkok: River Books.
- Stadtner, Donald M., (ed.), 1999, *The Art of Burma: New Studies*, Mumbai: Marg Publications.
- Stargardt, Janice, 1990, *The Ancient Pyu of Burma, vol. 1: Early Pyu Cities in a Man-made Landscape*, Cambridge: PACSEA.
- Supdt., govt. printing and staty., Union of Burma (Burma. Office of Superintendent, Government Printing), 1960 (1921), *Amended List of Ancient Monuments in Burma*, Rangoon: Supdt., govt. printing and staty.
- Temple, R.C., 1894, *Notes on Antiquities in Ramannadesa (The Talaing Country of Burma)*, Bombay: The Education Society's Steam Press. (Reprinted from the Indian Antiquary)
- Dr.Tha Hla & Dr.Nyi Nyi, 1958, "Report of the Field Work at Hmawza (Sri-Ksetra) and Prome," *JBR* 41-1&2:83-97.
- U Tha Myat, 1963, *Pyu Hpalsa – Pyu Reader*, Rangoon. (ビルマ語)
- Than Tun, 1978, "History of Buddhism in Burma, A.D.1000-1300," in *JBR* 61-1 & 2: 1-262.
- Tin Maung Htwe, 2007, "Kyaikkatha Myohaung (チャイカター古代都市)," in *Myanma Shehaung Myodawmya* (ミャンマーの古代都市) (Yangon: Dept. of Historical Research, Ministry of Culture): 184-201. (ビルマ語)
- Wheatley, Paul, 1983, *Nagara and Commandery: Origins of the Southeast Asian Urban Traditions*, The Univ. of Chicago.
- なお、本稿は表記プロジェクト研究の研究成果であると同時に、H.21～24年度科学研究費補助金基盤研究（A）「南アジアおよび東南アジアにおけるデーヴァラージャ信仰とその造形に関する基礎的研究」（代表 肥塚隆）の研究成果でもある。

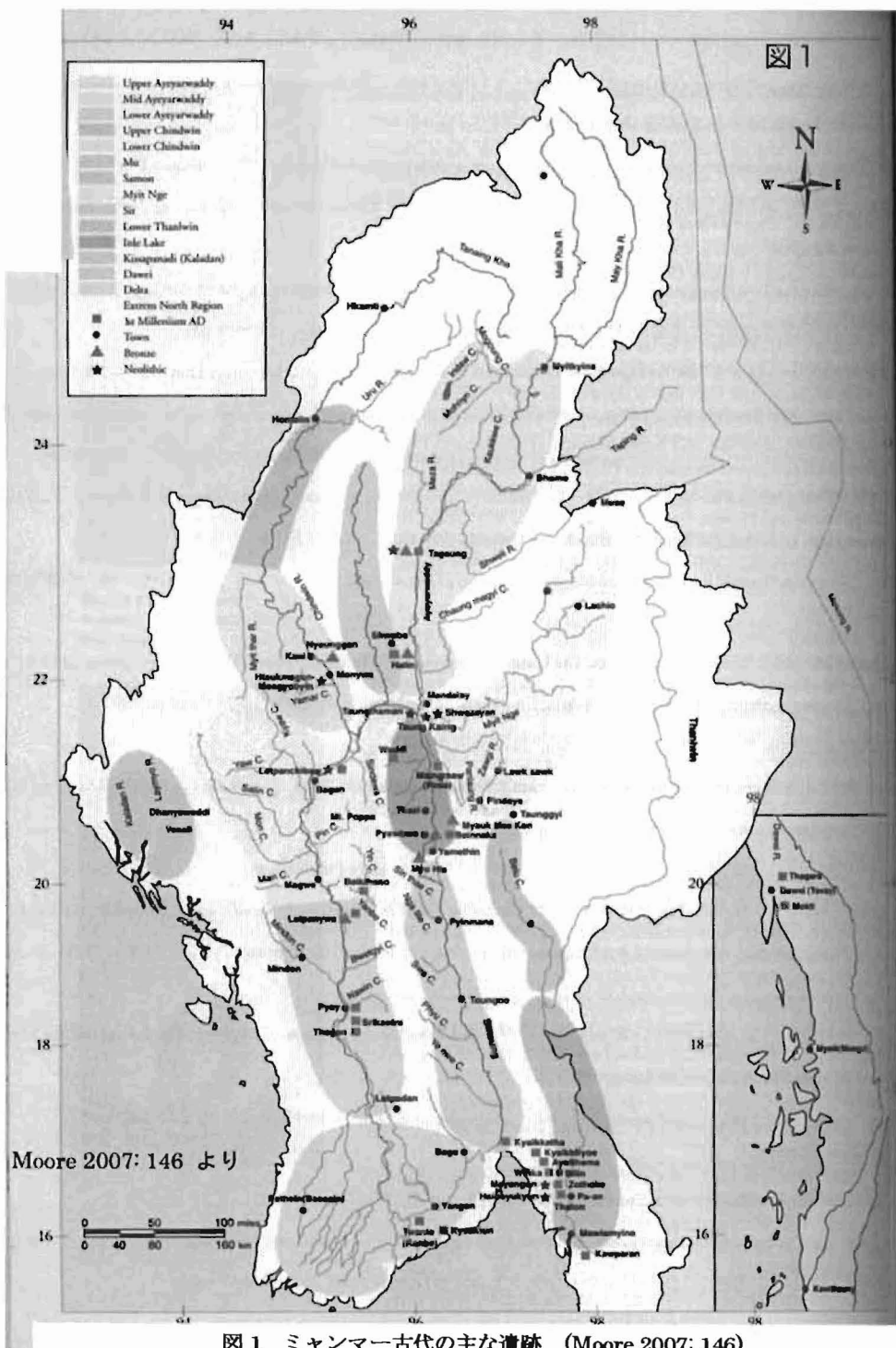


図1 ミャンマー古代の主な遺跡 (Moore 2007: 146)

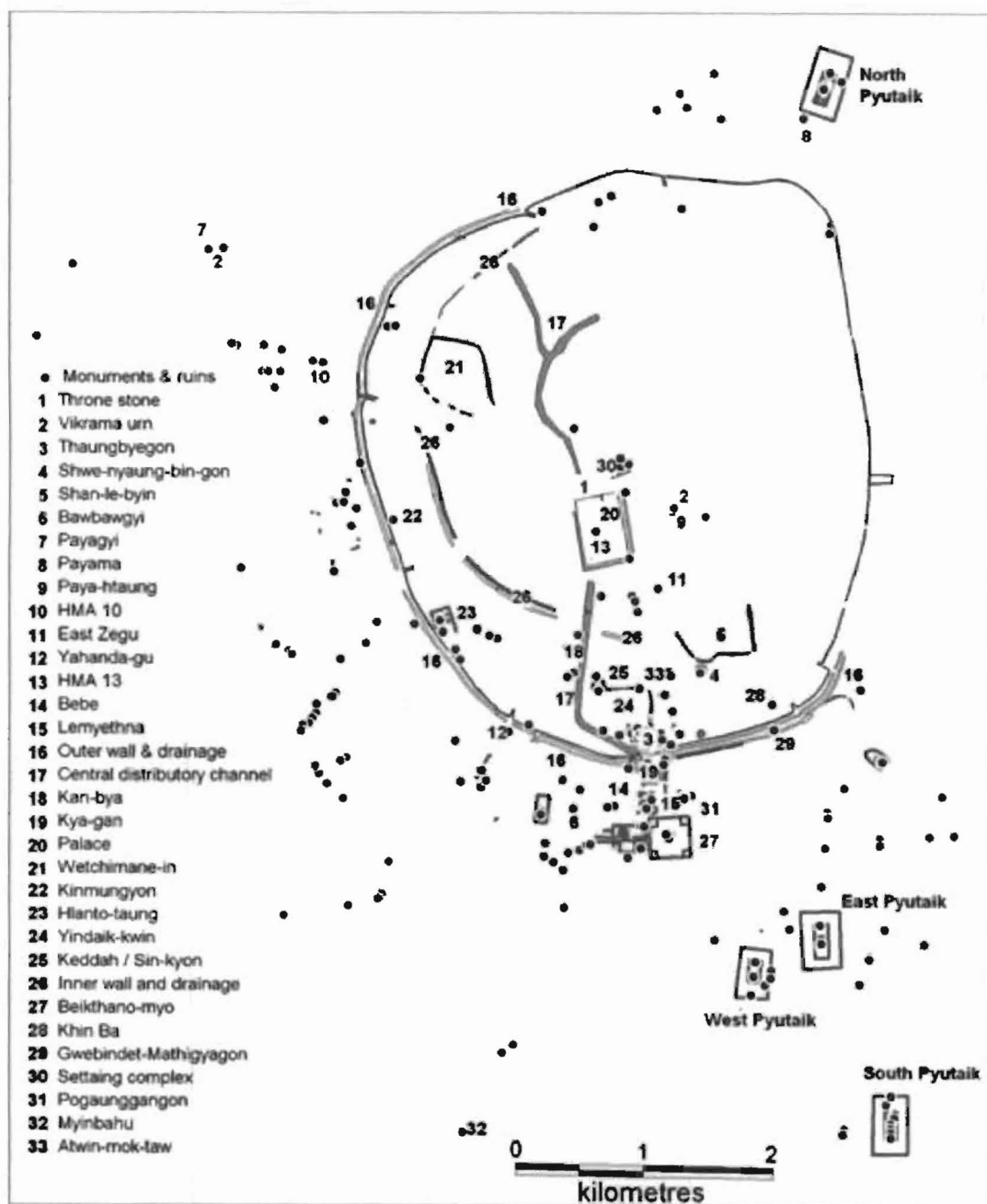
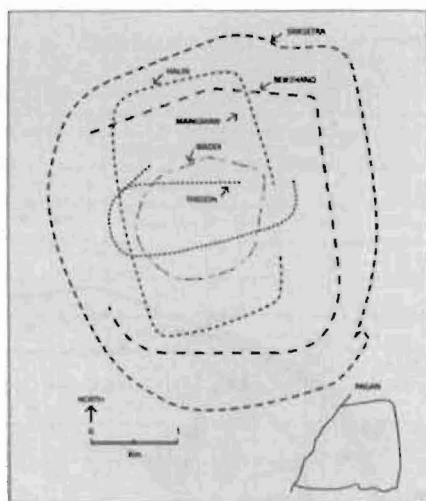


図2 タイエーキッタヤー（シュリークシェートラ）遺跡図（Hudson & Lustig 2008: 275）



The walled site of Bagan is small in comparison with the major 'Pyu' sites. (After Aung Myint)

図 3 他の都市遺跡との比較 (Moore 2007: 148)